慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・ズルツ著 快楽の礼讃
Sub Title	The praise of pleasure philosophy, education, communism in More's Utopia, 1957 by Edward Surtz, S. J.
Author	渡辺, 和一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.2 (1960. 2) ,p.195(77)- 201(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19600201-0077
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Januar. 1905. (S. 31)

(4) Ebenda. (S. 33)

(5) Aktennotiz des Polizeidirectors Eckhardt. (Berlin, Ende Mai 1907)

(6) Der Polizeipräsident in Berlin, Abteilung Ⅶ, an den Minister des Innern, Berlin, 26. November 1907. (SS. 65-66)

(7) Der Polizeipräsident in Berlin, Abteilung Ⅶ, an den Director des Polizeidepartements im Ministerium des Innern in Petersburg, Berlin 6. Dezember 1907. (S. 69)

(8) Brief des russischen Enigranten Nasorow an einen nicht gennanten Empfänger, vorgefunden bei dem Russen Tschitscherin, Zurich, 5. Dezember 1907. (S. 77)

(9) Aus den Reichstagsreden des Abgeordneten Fritzen und des Reichskanzlers von Bülow am 6. Dezember 1905. (S. 95)

(10) Ebenda. (S. 96)

(11) Aus der Reichstagsreden des Abgeordneten Bebel am 14. Dezember 1905. (SS. 100—101)

(12) Ebenda. (S. 102)

(13) Ebenda. (S. 103)

(14) Notizen des Reichskanzlers von Bülow 30, Oktoker 1906. (SS. 129—130)

(15) Der Justizminister an den Staatssekretär des Reichsjustizamts, Berlin, 26. Januar 1906. (S. 157)

——一九五九・一二・一五——

書評及び紹介

E・スルツ著

『快楽の礼讃』

(The Praise of Pleasure
Philosophy, Education, & Communism
in More's Utopia, 1957
by Edward Surtz, S. J.)

I

色々な角度からのトマス・モアの研究がある。文人、法律家、政治家という経歴の賑やかさに加えて、その時代がルネサンスと宗教改革の交錯する時代、経済的には原始的資本の蓄積、政治的には絶対主義王制の成立する時代、しかもその全ての要素がモアの作品にとけこんでいるため、考察者のみる立場により角度によってトマス・モアの姿は色々に変貌する。そこには過渡期の歴史を生きた人を理解する困難さがある。われわれはモアの研究にあたって過去の豊かな文献（例えば Sullivan "Moreana" が示すように）の中から細心に多角的なモアの側面を一つ宛明らかにし、それを再構成してゆく必要がある、その意味で過去の諸労作をふり返りその中で Surtz の本書の性格を考えてみたい。先ず K. Kautsky "Thomas More und Seine Utopie" (1887) は近代社会主義の先駆者としてモアをみることにより、社会経済史的背景から位置づけようとした。一歩その分析を進めてモアをロンドン市民層の代表と規定したのは、R. Ames "Citizen Thomas More and his Utopia" (1949) である。市民モアの意味する内容が更に明らかにされねばならぬ。これらがモアの「ユートゥピア」に研究の焦点を置くにとどまるに対し、R. W. Chambers "Thomas More" (1935) は周到なモアの伝記として貴重である。文学的な研究として「ユートゥピア」の創作過程を綿密に跡づけて、モアの思想を究明しようとする J. H. Hexter "More's Utopia" (1952) の労作がある。ここにとりあげる E. Surtz "The Praise of Pleasure" も文学史的な方法により、副題で分るように「ユートゥピア」の教育、学問論を主題に特殊研究をしようとするものである。著者は「ユートゥピア」第二部第六章の快楽論、学問論に含まれる思想史的系譜を明らかにしながらその根柢をなす思想構造を指摘しようとする。勿論それは「ユートゥピア」のある一面を解明するにすぎない。しかし「ユートゥピア」研究の新しい方向を示唆するものとしてその意義は大きい。もっともその基礎には J. H. Lupton "Utopia" (1895) の古典的な脚注が支えとなっている事は見過し難いであろう。尚わが国においても最近小畑子ながら沢田昭夫著「トマス・モア」(1959) の労作を得た。従来不思議なくらい閑却されていた「法の人」モアという鋭い視点から分析が試みられ、モアの全作品を全て原語でという当然ながら堅

実な追求の姿勢が覗える。「コモン・ローの人」モアが更に鮮かな浮彫にされるのを期待したい。漸くモアの研究がわが国でも地につついてきたと言えよう。

II

E. Surtz "The Praise of Pleasure" が「ユトゥピア」第二部第六章の個別研究の性格をもつ意義を述べたが、本書の内容は三部に分れる。快楽論（二章―七章）教育学問論（八章―十二章）および共産主義論（十三章―十五章）である。いささか人の意表をつく「快楽の礼讃」という題名は、「ユトゥピア人の考えが、快楽を弁護する人々、つまり人間の幸福のほとんどすべては快楽にあるとする人々の考えに、あまりに偏りすぎているように思われる」という快楽論の説き起こしからきているのは勿論であるが、同時にそれは、モアの親友エラスムスの「痴愚神礼讃」Encomium Moriae に因んだものであろう。モア家滞在中に書かれモアに捧げられた「痴愚神礼讃」は、溢れるばかりの諷刺と諧謔で社会を痛烈に批判した点、モアの「ユトゥピア」と相通ずるものがあり、諷刺と諧謔のはなやかさに惑わされて真意を理解し難い点でも良く似ている。このような事情から著者はエラスムスの書名をもじって「快楽の礼讃」としたものであろう。以下内容を三部に分けて概観することにしよう。

「ユトゥピア」解釈の中で、しばしば躓きの石となるのが快楽論で

ある。全ての幸福は快楽にあるという考えを支持するユトゥピア人は、エピクロスの徒と受けとれよう。ではモアは快楽主義の哲学を「ユトゥピア」で説いたのであろうか。必ずしもそうではない。ここに巧みに説かれたモアの倫理学が存在するのである。快楽 pleasure（＝Uoluptas）は本来身体や感覚の快楽を意味するものであるが、広義には心身両面の快楽をも含むものであった。しかし joy（laetitia）や gladness（＝gaudium）は身体の快楽には用いられなかった。この言葉の用法はヒューマニスト達にとって身近かなものであったに相違ないにも拘わらず、モアは Uoluptas に最高の価値をおくユトゥピア人を好んで描いた。これは Uoluptas で最初に読者の注意をひきつけ、身体の快楽の納得しやすさから説き始めて、心身ともに快楽を感ずることの良さに説き及ぼし、快楽こそ人間幸福の本質であり、快楽のなかで最高のものは心の快楽であるから、結局は心の快楽が幸福の本質であると論ずる。ここまでくれば快楽は美徳 virtue と一致するものとなる。uoluptas の内容がいつの間にか高められたのである。ユトゥピア人の奉ずるエピクロスの哲学はこのようなものであった。モアが快楽の哲学を論じた背後には、実はルネサンス期におけるエピクロスの思想の復活があった。

中世を通じて久しくエピクロスの哲学はその亜流のエピキュリアン達と混同され誤解されてきたが、漸く十五世紀の初めにはディオゲネス・ラエルティオス（Diogenes Laertios）の「哲人伝」が Ambrogio Traversari の手でラテン訳され広く読まれた。「哲人伝」の第十巻はエピクロスの生涯と学説を収めたもので、これがエピクロスの理解を著しく促した。イタリアのヒューマニスト、ヴァラ（Lorenzo Valla）の「快楽と真実の善」De Uoluptate ac vero bono（1431）には、その反映が認められるし、ドイツのニコラウス・クサヌス（Nicholaus Cusanus）はエピクロスをエピキュリアンから差別しようしたことに、エピクロスの復活が感じられる。北方ヒューマニストへのヴァラの影響は容易ならぬものであるが、ヴァラによってエピクロスは一層ヒューマニストに親しまれることになった。エラスムスもその影響を受けたことは彼の「対話集」Colloquia に入っている "The Contempt of the World" "The Epicurean" が示している。恐らくトマス・モアも、エラスムス同様に「哲人伝」を Traversari の翻訳で読み、ヴァラの著作によってエピクロスについて啓発されたのであろう。「ユトゥピア」に名前のみえるアメリゴ・ヴェスプッチ Amerigo Vespucci の旅行記にもエピクロスは言及されている。このようなエピクロスの再認識は、その快楽説が肉体的快楽よりも精神的に静かな快楽を尊ぶものであり、それは長い間の誤解を解くものであった。エラスムスが "The Epicurean" の中で敬虔なキリスト教徒より大いなるエピキュリアンはいないと説き、モアが「ユトゥピア」で快楽を論ずるのは、このようなエピクロス理解に基づいている。又、モアは「ユトゥピア」の登場人物ヒュトロデウスに、セネカとキケロを唯一の読むに値するラテン作家と言わせているが、そのセネカはエピクロスの快楽が美徳と密接不離なものであるのに、エピクロスの徒がエピクロスの快楽が如何に真剣なものであるかを悟らないと指摘している。モアはエピクロスの理解をセネカにも負っていたと言えよう。しかし「ユトゥピア」の書かれた頃、エピクロスは決して好意の目で迎えられる思想家ではなく、一般には誤解につつまれた快楽の哲学者であった。モアはこの事情を逆用して身体の快楽から心の快楽へと自己の倫理学を展開した。ではエピクロスはモアの思想と一致したのか。ユトゥピア人はエピクロスの否定する霊魂の不滅、神の摂理、来世における因果応報を信じている。快楽と美徳の一致というエピクロスの考えを、エラスムスは快楽と信仰の一致と改めなければおさまりがつかなかった。モアにあっても快楽は人生最高の価値であるが、同時にそれは神の信仰と一致するものでなければならなかった。思想上の相違はあるにせよ、エピクロスがモアを始めとするヒューマニスト達に強く訴えたのは何故であろうか。宗教のもつ欺瞞や迷信を嫌悪し、飽くなき挑戦をしたエピクロスが、ヒューマニストの心を捉えたのであった。エピクロスの反宗教的性格を、エラスムスと共にモアが訳出したことのあるルキアノスが強調しているのはその間の事情をうかがわせるものである。

「ユトゥピア」に受け継がれたエピクロスの遺産の思想史的関連は上述の通りであるが、快楽にも真実のものと虚妄のものとがあり、ユトゥピア人はそれを識別する基準を体得している。この真偽を見分ける尺度によって、「ユトゥピア」はヨーロッパにはびこる虚妄

の快楽を手厳しく批判する。富への渇望にとりつかれた社会、賭博に血迷った世の中等。当時のヨーロッパが諷刺の対象とされたあと、「ユトゥピア」における真の快楽が示される。そこでは五官の快楽も軽蔑されずそれなりに正しい位置に評価されるが、身体の快楽では五官の快楽より健康が尊ばれる。一方心の快楽も、真理を知る快楽と美徳を実行する快楽とから成り立ち、ユトゥピア人が最高の価値をおくのは後者である。即ち快楽の中にも階層的序列があり、それがヨーロッパの現状批判の尺度となっている訳である。

Ⅲ

ユトゥピアの快楽の哲学は、ヨーロッパを道徳的頽廃へおいこむ虚妄の快楽とは厳しく対立するものであった。ユトゥピア人がこのように虚妄の快楽を憎み、真実の快楽を学ぶのは、教育と良き文学や学問によるものであるとヒュトロデウスは主張する。ユトゥピアでは何よりも子弟の教育が尊重され正しい批判の原理が教えこまれる。人間よりも黄金を重んずるヨーロッパとは好対照である。プラトンは教育を或る偉大なるものと呼び、エラスムスは教育こそあらゆる美徳を生むものと説いたが、「ユトゥピア」にみる教育の重視はそのような思想の流れを汲むものである。当時イギリスのジェントルマンは、学問や教育にむしろ冷淡で、息子に文学を学ばせる位なら首を絞め殺した方がましだと放言してヒューマニストを嘆かせているような文献も残っている。この社会的雰囲気に対しモアは

「ユトゥピア」によって教育学問の尊重を唱えたのである。ところで「ユトゥピア」の教育学問論は如何なるものであるか。それは快楽論を中にはさんで前後の二箇所に述べられており、その内容もまた二つに分れる。第一の部分はユトゥピア人独自の力で発見した知識の紹介で、同時にそれはヨーロッパのスコラ学派への痛烈な諷刺となっている。第二の部は、ヒュトロデウスが新たにユトゥピア人に教えて、盛んに今学ばれつつあるギリシャの学問の紹介であるが、これはトマス・モアが提案する人文主義的な教育改革案とみるべきものであった。要するに「ユトゥピア」の学問論は、スコラ学派を批判しそれに代る改革案を示すのが狙いである。先ずユトゥピア人が自らの力で習得した知識について見るに、その学問的水準は算術、幾何、天文学および音楽においては、ヨーロッパ古代の哲学者に匹敵する。特に天文学には秀いでているけれども決して占星術の如き似非科学に陥ったりはしない。モアが天文学の話を好んだという事実とヨーロッパに横行する占星術への非難を反映している。又上述の四種の学問はプラトンの尊ぶところでもあった。しかし、以上の分野では尊敬すべき古代の哲学者にさえ遜色のないユトゥピア人も、論理学となるとヨーロッパの新しい論理学者に及びもつかない。なぜなら制限、拡大、小論理学、或いは第二普遍概念と言ったことを考案した中世の論理学をユトゥピア人は理解できない。ここで古代の哲学者と新しい論理学者とが対照的に述べられたのが注意される。新しい論理学の精緻を極める発展には及びもつかないと言う裏には、徒らに枝葉末節の中で議論をもてあそび、抽象とか普遍といった概念にこって、現実に重要な具体的な問題を処理する能力を失ったスコラ学派への冷笑が秘められている。現実の問題にとりくむには古代の哲学者の教えた知識で充分であり、ユトゥピア人はそれを自分の力で体得しているという訳である。ヨーロッパのスコラ学派の現状が、空虚で複雑怪奇な論議により年少の子弟の教育を損いその成長を妨げていることに対するトマス・モアの批判であった。だがモアの攻撃は反動スコラ学者に向けられたもので、必ずしもトマス・アクィナスを拒むものではない。硬化して学問のなかにもはや熱い血が通っていないスコラ学派の手から、ヨーロッパの教育と学問を解放するのがヒューマニストの念願であった。そのような知識的救済の方法が、「ユトゥピア」の学問論の第二の部分をなす教育改革案である。それはギリシャ古典の復活にほかならないが、ヒュトロデウスの紹介したギリシャの学問を、ユトゥピア人は既得の知識を補い発展させるものとして大手をひろげて歓迎するように、ヨーロッパ人も大いにギリシャ語を学ぶ必要がある。キリスト教の源泉である新約聖書や初期の教父の註解もギリシャ語であり、ヨーロッパ学芸の源泉もギリシャ語にあるからであった。ギリシャ学に対するヒューマニスト達、Colet, Erasmus, Fisher, Dorp等の態度も多かれ少なかれこのような点で共通していた。モアの態度を知る文献としてDorp宛書簡とオックスフォド大学宛の書簡が貴重である。ヒュトロデウスがすぐヨーロッパに帰るくらいなら一

層永久に帰るまいと決心して船の中に積みこんだ書物のリストは、ヒューマニスト達の教育改革案の典型的な一例であり、単なるモアの思いつきや気紛れになるものではない。このような改革案は、例えばエラスムスの "A Plan of Study" (1511) "An apology against the Dialogue of James Latomus" (1518) "Method of True Theology" (1519) "Ecclesiastes" (1535) の中にも見出すことができるのであるが、モアのリストをこれらとの比較で調べるのは当時のヒューマニスト達の一般的見解を知るに役立つであろう。リストの選択にあたってモアとエラスムスの殆ど全面的な一致をみるのであるが、これはエラスムスのモアへの絶大な影響を物語っている。モアのリストは第一に哲学者で始まる。プラトン、アリストテレス、テオフラトスの三人があげられるその順序までエラスムスと一致する。プラトンのルネサンスへの影響は言うまでもない。アリストテレスは「ユトゥピア」でも言及されているアルドゥス版の刊行にモアの僚友 Grocyn や Linacre が一役を演じている。第二は文法書（テオドルスとラスカリオス）、辞書類（ヘシュキオスとディオスコリデス）である。エラスムスはテオドルスをラスカリオスに優ると言い、自ら翻訳の労をとっている。第三に特殊な二人の作家、プルタルコスとルキアノスがあげられる。プルタルコスを歴史家に分類していないのは英雄伝より Moralia の作者として尊重したものであろう。エラスムスが両者に言及しているのは勿論である。第四に詩人、アリストファネス、ホメロス、エウリ

ピデス、ソフォクレスの四人があげられるけれども、ソフォクレスが欠けるだけで他の三人の順序はエラスムスにあっても同じである。第五に歴史家がくる。トゥキュディデス、ヘロドトス、ヘロディアス。エラスムスはヘロディアスを省いている。第六に科学者、ヒッポクラテスとガレノス。モアは自然科学、とりわけ医学を重視したが、Bude の寄せた「ユトゥピア」の序文で分る通り友人 Linacre がガレノスを翻訳したこともこのリストに反映しているかも知れない。一方エラスムスが推していながらモアの表に名前の見えないのがデモステネスである。前記のエラスムスの著作の中、三冊までがデモステネスをあげている。そのほかにはアエソポス、クセノホン、プトレマイオス等が認められる。尚イギリスのヒューマニスト Elyot の計画案は、六人の中四人がモアのリストと一致して、十四歳以前にルキアノス、ホメロスを学び十四歳以後プラトン、アリストテレスを推奨するが、それ以外にデモステネスとアエソポスを挙げている。すでに見たようにヒュトロデウスの携えたのはギリシャ文献のみである。それは十六世紀初頭のイギリスがギリシャ古典研究をめぐってその価値と必要が激しく議論されたことを意味する。モアのリストはヒューマニストの闘いの重要文書であった。

Ⅳ

ユトゥピア人は真実の快楽を教育と学問に学んだのであるが、彼等は最高の学問をギリシャ古典にみた。しかもギリシャ古典中第一等の地位を占めるプラトンの共産主義は、ユトゥピアの共産主義の基礎をなすものであった。二つの共産主義は、一方が貴族的であるのに対し他方が民主的で階級のない社会という相違はあるにせよ、プラトンが原形であることに変りはない。ユトゥピア人の快楽主義は又、その共産主義と深く関係している。共産主義こそは最大の快楽を得、最小の苦悩にとどめる最善の道と考えられるからである。

モアの共産主義論を理解するには、その思想史的背景から知るべきである。一方にプラトンに始まるギリシャ古代の源泉があり、他方、原始キリスト教の根柢がある。プラトンの共有制はアリストテレスによる反論を生み、原始キリスト教は中世カトリック教会によって遂に実定法を根拠にしてではあるが私有制を認めるまでに改変された。ルネサンスのヒューマニストはこのような歴史のなかで、プラトンや原始キリスト教を復活して、共産主義論を唱えた。この風潮の中でモアの「ユトゥピア」はその際立った主張の典型であった。しかしヒューマニストは共産主義実現の具体案は何一つもちあわせなかった。彼等にとってそれは理想像ではあっても、現実に実行しうるものとまでは考えられなかったであろう。モアにとって「ユトゥピア」の共産主義を内から支えている倫理的世界観が、何ものにもまして本質的なものであった。

Ⅴ

本書の特色は「ユトゥピア」の中の難解な一章を、同時代の文献だけでなく古代の文献にもさかのぼり、豊かな資料を駆使して文学史的な流れの中に位置づけることによって、その意義を解明するにある。その限りにおいて本書は立派な成果を収めている。本書を批判するよりはむしろこのような周到な研究が「ユトゥピア」の全面にわたって進められることを先ず望むものであるが、文学史的方法という枠をこえてそれらの文献を生みだした社会との繋りへの究明に全くふみだそうとしないのは甚だしく物足りない。例えば共産主義論にしても、肝心な社会経済との関係を無視して文献史的な範囲で論じるのでは、その結論がいずれにせよ、単なる抽象論の域を出ない。モア自身、現実社会を批判の対象として構想したことを考えれば、結局非常に一面的な考察よりの結論というほかはない。又、文学史的な研究として位置づけるだけでなく、モア自身の精神史的な位置づけがなされるべきであろう。むしろモアの思想がここでは静的に平板に定着された印象をぬぐい難い。「ユトゥピア」を境にモアの思想には宗教改革を契機とした変化が生じなかっただろうか。ティンダルとの論争の時代と「ユトゥピア」の時代とを同日に論ずることに疑問を覚える。社会経済史的背景の中に、モアの思想発展史の一環として捉えるなら、本書の成果は、実に有効な形で再構成されるのではなかろうか。――一九五九・一二・六――

（渡辺和一郎）

C・ウイルソン『重商主義――解釈の変遷――』

Charles Wilson, 'Mercantilism': Some Vicissitudes of an Idea. Economic History Review, Second Series, Vol. X, No. 2, 1957, pp. 181-186.

Ⅰ

十七世紀初頭から十八世紀中葉にいたるまで、ヨーロッパ諸国において支配的な経済政策の基調は重商主義であった。その本質については、時代と場所を異にするに従い、これまでいろいろ解釈がおこなわれて来た。しかしそれによって重商主義の真に何たるかが明瞭にできたとは思えない。

最近の成果にまつまでもなく、すべての重商主義者に共通な点といえば、次の四点であろう。一、富は本質的に力である。二、力は本質的に富である。三、富と力は政治の最終目的である。四、軍事上の安全から経済上の犠牲が要求されることがよくあるかもしれない。しかし富と力は両立する。重商主義の本質をつくものとして、まったく正鵠を得ており、全面的に納得できる。従って重商主義の何たるかをいう際に考慮すべきは、これら諸点である。しかしこれまでの解釈では、それら諸点のうちどれか一つをもって全体を説明しようとするにとどまった。複雑な現象の一側面だけをみて、概念